京劇の表現技法にみる中国伝統の身体観
― 色彩・性格の表現と五臓の主る精神

富燦霞
（明治大学 アジア太平洋パフォーミング・アーツ研究所）

國立台灣藝術大學舞蹈學系　2019 年度公演　作品(左より)：《畫夢錄》・《夜門》・《六月茉莉》　写真編集：富燦霞

【発表要旨】

20 世紀の中国は、封建社会から現代社会へと転換し、思潮や教育も伝統中国の方式から西洋の考え方へと急変した。中国舞踊も例外ではなく、数千年にわたり続いた中国古典舞踊の伝承が、宮廷舞踊隊の解散に伴って途絶えた。舞踊家らは中国舞踊を存続させるため、戯曲の舞踊表現を掘り起こした。こうして、戯曲は近現代の中国舞踊再創造の源となった。

その後、中国舞踊は多様な発展を遂げた。改革を目指す新しい訓練体系が、クラシックバレエの方法を全面的に取り入れて創り出された。その中で、戯曲の動きは演技を構成する副次的な一部分にすぎず、舞踊自体を目的とする「純粋」な表現とは一線を画するという見方が生まれた。また、モダンダンスの創作に戯曲の表現を取り入れ、作品の民族性を強化する者も現れた。伝統を守りたいと意識している舞踊家も多いが、各々の美的感性によって戯曲の技法や身体表現は微妙に変化している。以上のように中国舞踊は、戯曲から再出発したものの、外来の西洋舞踊を土台として発展する傾向が見られる。

本研究は、戯曲をもとに、中国独自の身体表現を伝統の視点から探るものである。これまでは、基本技法の分析から始めてその表現原理を明らかにし、他の中国伝統芸術の表現と比較・考察した。現在は、伝統中国医学の身体観との比較・検証を進めている。